



北京高等教育精品教材

BEIJING GAODENG JIAOYU JINGPIN JIAOCAI

日语

高年级教程

上册



谢为集 主编



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

日语高年级教程

(上册)

主编 谢为集

编者 陈常好 吴世平

铁 军 王宇新

吕文辉 圆桥义则



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

日语高年级教程(上册) / 谢为集主编. —北京: 北京大学出版社, 2007.8
ISBN 978-7-301-12418-5

I. 日… II. 谢… III. 日语—高等学校—教材 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2007)第 084000 号

书 名: 日语高年级教程(上册)

著作责任者: 谢为集 主编

责任编辑: 许耀明

标准书号: ISBN 978-7-301-12418-5/H·1786

出版发行: 北京大学出版社

地 址: 北京市海淀区成府路 205 号 100871

网 址: <http://www.pup.cn>

电 话: 邮购部 62752015 发行部 62750672 编辑部 62765014 出版部 62754962

电子邮箱: zpup@pup.pku.edu.cn

印 刷 者: 世界知识印刷厂

经 销 者: 新华书店

787 毫米×1092 毫米 16 开本 13.5 印张 320 千字

2007 年 8 月第 1 版 2007 年 8 月第 1 次印刷

定 价: 32.00 元

未经许可, 不得以任何方式复制或抄袭本书之部分或全部内容。

版权所有, 侵权必究 举报电话: 010-62752024

电子邮箱: fd@pup.pku.edu.cn

前 言

《日语高年级教程》上、下册是北京第二外国语学院日语专业多年来在高年级阶段使用的一套教材。其内容主要选自日本的初中、高中《国语》教材及其他资料，经过多年的教学实践，不断补充修改定稿而成。此教程在北京第二外国语学院日语专业使用将近十年，文章选材广泛，有随笔、评论、散文、小说、剧本、俳句、和歌、古汉语、古汉诗、现代诗歌等，内容包括语言、社会、文化、民俗。教程以日语专业三、四年级学生为教学对象，让学生在学日语的同时，更多地了解日本社会、历史、文化、风俗习惯等知识，以缩小与日本同龄人在语言、文化诸方面的差距。经过多年教学实践证明，在高年级阶段日语教学中使用上述内容进行学习训练，教学效果明显，对全面提高日语专业学生的日语水平和扩充相关知识有很大的帮助。

北京第二外国语学院日语专业在创立初期就开始探寻一套独自的教学体系和有效的教学方法。为贯彻“听说领先，读写译跟上”这一北京第二外国语学院的教学方针，培养高水平日语人才，日语专业选择了走一条所有教材全部自行编写的道路。在高年级日语教材选材中，不但注重语言规范、文章流畅，而且力求涉及面广、题材丰富，目的在于尽量缩小中国学生与日本同龄人之间除语言之外的其它方面的差距。

《日语高年级教程》是一套选编教材，最初成形于上个世纪八十年代，文章多数选自日本初、高中《国语》教材。通过二十多年的实践与摸索，在淘汰不恰当内容的同时，不断补充较新内容，逐渐成为上、下两册教程。其中不少内容使用了十年以上，经教学实践证明效果良好。其他内容也大都使用了五年，为正式出版打下了良好基础。

《日语高年级教程》分上、下两册，共三十课。上册十六课，下册十四课。每课均由课文、词汇表、作者简介、词语解说、练习与思考几个部分组成。课文选材以近、现代作品为主，语言表达采用了现代日语的标记方法。考虑到语言学习的特点，在课文内容编排时，尽量做到由浅至深、从易到难。词汇表中选入了较

为生僻、少见的词语，并注明了词性，配有中文词义。作者简介部分对作者的生平、著作等给予简单介绍。词语解说部分对日语的特殊表达、惯用形式以及与时代背景有关的词语等进行了简单的解释和说明。练习和思考的部分根据课文内容编写了简单的提问和思考题，以检查学生对课文内容的理解和掌握情况。

本教材由陈常好、谢为集、铁军、吴世平、王宇新、吕文辉及日本专家圆桥义则选编。由谢为集最终审核定稿。

为了便于教学，编写组特别编写了“教学参考手册”，供授课教师参考使用。如选用此教程进行日语教学，需要“教学参考手册”，请与编者联系（xieweiji@bisu.edu.cn）。

由于时间仓促，加之编写者水平所限，书中难免存在不足和纰漏，恳望批评指正。

编写组

2007年5月

目 録

第一課	水の東西	1
第二課	民家今昔	7
第三課	ウグイスが答えてくれた	12
第四課	無口な手紙	22
第五課	エスプリとユーモア	30
第六課	母国語の能力	37
第七課	身体に関する言い回し	44
第八課	考えをまとめる	57
第九課	庶民の知恵	68
第十課	含蓄について	78
第十一課	国語成長の楽しみ	90
第十二課	体験と思想	102
第十三課	立ち読みの楽しみ	114
第十四課	西村少年	123
第十五課	濠端の住まい	138
第十六課	幸 福	154
新出語彙総索引		171
参考文献		207



第一課 水の東西

山崎正和

「鹿おどし」が動いているのを見ると、その愛嬌のなかに、なんとなく人生のけだるさのようなものを感じることがある。かわいらしい竹のシーソーの一端に水受けがついていて、それに筧の水が少しずつたまる。静かに緊張が高まりながら、やがて水受けがいっぱいになると、シーソーはぐらりと傾いて水をこぼす。緊張が一気に解けて水受けが跳ね上がる時、竹が石をたたいて、こおんと、くぐもった優しい音を立てるのである。

見ていると、単純な、緩やかなリズムが、無限にいつまでも繰り返される。緊張が高まり、それが一気にほどけ、しかし何事も起こらない徒労がまた一から始められる。ただ、曇った音響が時を刻んで、庭の静寂と時間の長さをいやがうえにも引き立てるだけである。水の流れなのか、時の流れなのか、「鹿おどし」は我々に流れるものを感じさせる。それをせき止め、刻むことによって、この仕掛けはかえって流れて止まないものの存在を強調していると言える。

私はこの「鹿おどし」を、ニューヨークの大きな銀行の待合室で見たことがある。日本の古い文化がいろいろと紹介されるなかで、あの素朴な竹の響きが西洋人の心を魅きつけたのかもしれない。だが、ニューヨークの銀行では人々はあまりに忙しすぎて、一つの音と次の音との長い間隔を聴くゆとりはなさそうであった。それよりも窓の外に噴き上げる華やかな噴水のほうが、ここでは水の芸術として明らかに人々の気持ちをくつろがせていた。

流れる水と、噴き上げる水。

そういえばヨーロッパでもアメリカでも、街の広場にはいたるとこ

ろにみごとな噴水があった。ちょっと名のある庭園に行けば、噴水はさまざまな趣向を凝らして風景の中心になっている。有名なローマ郊外のエステ家の別荘など、何百という噴水の群れが庭をぎっしりと埋め尽くしていた。樹木も草花もここでは添え物にすぎず、壮大な水の造型が轟きながら林立しているのに私は息をのんだ。それは揺れ動くバロック彫刻さながらであり、ほとぼしるというよりは、音を立てて空間に静止しているように見えた。

時間的な水と、空間的な水。

そういうことをふと考えさせるほど、日本の伝統の中に噴水というものはない。せせらぎを作り、滝をかけ、池を掘って水を見ることをあれほど好んだ日本人が、噴水の美だけは近代に至るまで忘れていた。伝統は恐ろしいもので、現代の都会でも、日本の噴水はやはり西洋のものほど美しくない。そのせいか東京でも大阪でも、街の広場はどこことなく間が抜けて、表情に乏しいのである。

西洋の空気は乾いていて、人々が噴き上げる水を求めたということもあるだろう。ローマ以来の水道の技術が、噴水を発達させるのに有利であったということも考えられる。だが、人工的な滝を作った日本人が、噴水を作らなかった理由は、そういう外面的な事情ばかりではなかったように思われる。日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型する対象ではなかったのであろう。

言うまでもなく、水にはそれ自体として定まった形はない。そうして、形がないということについて、恐らく日本人は西洋人と違った独特の好みを持っていたのである。「行雲流水」という仏教的な言葉があるが、そういう思想はむしろ思想以前の感性によって裏づけられていた。それは外界に対する受動的な態度というよりは、積極的に、形なきものを恐れぬ心のあらわれではなかつたらうか。

見えない水と、目に見える水。

もし、流れを感じるだけで大切なのだとしたら、我々は水を実

感するのにもはや水を見る必要さえないと言える。ただ断続する音の響きを聴いて、その間隙に流れるものを間接に心で味わえばよい。そう考えればあの「鹿おどし」は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を現す仕掛けだと言えるかもしれない。

高等学校『新国語』I(大修館書店)より

● 新出語彙 ●

鹿おどし [ししおどし]	(名)	竹制的一种庭院装饰
愛嬌 [あいきょう]	(名)	给人带来的乐趣
けだるい	(形)	疲倦、倦怠
シーソー	(名)	翘翘板
笕 [かけい]	(名)	引水的竹筒(等)
水受け [みずうけ]	(名)	接水、盛水的器皿
ぐらりと	(副)	倾倒状
こおんと	(副)	“嚏”的响声
くぐもる	(自五)	沉闷
徒劳 [とろう]	(名)	徒劳
音響 [おんきょう]	(名)	音响、响声
せき止め [せきとめ]	(名)	堵住、截住(水流)
仕掛け [しかけ]	(名)	装置
魅きつける [ひきつける]	(他下一)	吸引
噴き上げる [ふきあげる]	(他下一)	(使水)喷出
噴水 [ふんすい]	(名)	喷水
くつろぐ	(自五)	身心放松
趣向 [しゅこう]	(名)	某事物中含有的意思、情趣
凝らす [こらす]	(他五)	凝聚、凝结
ローマ	(名)	(意大利)罗马
エステ家 [エステけ]	(名)	埃斯太家族

別荘 [べっそう]	(名)	別墅
とどろく	(自五)	轰鸣、鸣响
息をのむ [いきをのむ]	(组)	惊讶得出不了声
バロック	(名)	巴洛克式
ほとばしる	(自五)	飞溅
せせらぎ	(名)	潺潺流水声
間が抜ける [まがぬける]	(组)	傻乎乎
圧縮 [あっしゅく]	(他サ)	压缩
ねじ曲げる [ねじまげる]	(他下一)	扭曲、拧弯
行雲流水 [こううんりゅうすい]	(名)	行云流水
裏づける [うらづける]	(他下一)	证明、取证
外界 [がいがい]	(名)	外界
受動的 [じゅどうてき]	(形动)	被动地
断続 [だんぞく]	(自サ)	断断续续
間隙 [かんげき]	(名)	间隙
極致 [きょくち]	(名)	最佳、最好

● 作者について

山崎正和 (やまざきまさかず)

一九三四年(昭和九)～。劇作家・評論家。京都府生まれ。主な著作—評論『芸術現代論』『鴉外—闘う家長』『劇的なる精神』『不機嫌の時代』、戯曲『世阿弥(ぜあみ)』『野望と夏草』など。

● 言葉の解釈

一、鹿おどし

庭園施設の一つ。一方を削って水がたまるようにした竹筒に水を落とし、

その重みで支点の片側が下がり、水が流れ出すとはね返って、他の端が石などを打って音を出す装置。添水（そうず）とも言う。

二、人生のけだるさ

「け」は接頭語。形容詞、動詞などについて、「様子が……である」「何となく……である」の意を表す。「けだるさ」は、何となく怠そうな様子。

三、筧

水を引いてくるために、地上にかけた渡しとい。

四、曇った音響

竹が石をたたく時の、こもったような優しいこおんという音。

五、時を刻んで

「刻む」は、「時を刻む」「年齢を刻む」などのように、細かく区切るようにして継続的に動作や状態を続ける意。

六、いやがうえにも

（すでにそうである上に）いよいよ。ますます。

七、名のある庭園

名前の知られている庭園。有名な庭園。

八、趣向を凝らして

面白い工夫がされて、施されて。

九、エステ家

イタリアの王族。16世紀に、ローマ郊外のティボリに壮大な別荘を造営した。

十、ぎっしりと埋め尽くしていた

「ぎっしり」は、隙間なく一杯に詰まっている様。

十一、ここでは添えものにすぎず

「添えもの」は、付け足しのもの、おまけの意。

十二、私は息をのんだ

「息をのむ」は、驚いた時などに思わず息がとまること。

十三、バロック

（フランス語）16世紀末から18世紀初めにかけてヨーロッパで流行った絵画、建築、彫刻、音楽の様式。複雑華麗で、動感に富んでいる。

十四、間が抜けて

「間が抜ける」は、大事な点を落としている場合や、頭のはたらきが足りない場合に用いる語。

練習と思考

- 一、「鹿おどし」が「なんとなく人生のけだるさのようなもの」を感じさせるのはなぜか。
- 二、「静かに緊張が高まり」とあるが、これは具体的にどういうことを言っているのか。
- 三、「それをせきとめ、刻むことによって」の「それ」は何をさすか。
- 四、日本人が近代に至るまで噴水を作らなかった理由を、次の(1)、(2)の事情に即して答えてみよう。
 1. 外面的事情
 2. 内面的事情
- 五、「そういう思想」の内容を説明してみよう。
- 六、「思想以前の感性」とあるが、それを具体的に表している箇所を、本文より抜き出してみよう。
- 七、「それは外界に対する……」の「それ」は何を指すか。
- 八、本文中の次の三つの対句的表現について、それぞれの具体的な内容をまとめてみよう。
 1. 流れる水と、噴き上げる水
 2. 時間的な水と、空間的な水
 3. 見えない水と、目に見える水
- 九、「鹿おどし」は、「日本人が水を鑑賞する行為の極致を現す仕掛けだと言えるかもしれない」と言う理由を説明してみよう。



第二課 民家今昔

富岡多恵子

今わたしが住んでいる辺りは多摩丘陵の一部だそうで、たいへん起伏に富む土地である。散歩にはいいが、階段も多いから荷物のあるときや急いでいるときはちょっとつらい。少し離れた所の農家の六十歳くらいになる奥さんは、嫁に来たときは駅からここまで三軒か四軒しか家がなかった、と話していた。しかし今は、急な起伏もことごとく征服されて、びっしりと家が建っている。

散歩しながら、比較的新しく建った家の並びを眺めていると、まるで住宅会社のモデル・ハウス展示場を歩いているような錯覚が起こる。強い傾斜、狭い土地にそれぞれ工夫を凝らした家が並んでいる。ところが、それらの家々を見ていると、家とはそこに住む人の思想、と言っては大げさだが、なんらかの態度と美意識が丸出しになるものだといつも感じ入ってしまう。いつのころから、日本人は、こんなに全体的に白い家に住むのを好むようになったのかと思うくらいに、白い家がほとんどだ。そしてほとんどが、どこか外国の家の形を日本化したものである。

同じ多摩丘陵の続きに、日本民家園といって、昔の民家を二十数軒集めて公園のようにした所があり、以前はよくそこへ散歩に行った。江戸時代の各地方の農家や町家があり、合掌造りの大きな家もある。もちろん、遠くからそれらの昔の家を運んできて元のおりに建て直したものである。

まず外から眺めて、その形、その色が周りの日本の樹木や土や空の色によく似合うことに驚かされる。時代によって、またそこに住んだ人の階級や職業によって、真っ白な壁もあれば、荒壁のままのものも

ある。屋根も、板ぶきもあれば、瓦ぶき、茅ぶきもある。しかし、どれも、周りの樹木、土、空の色に、更に言えば、日本の空気の湿り具合、日本の雨や風にもよく似合うように思える。また内部に入って座ると、その空間のおおらかさに驚かされる。

この数十年の間に、日本は農耕型社会から急に工業型社会に変わったのであるから、今、ああいうふうな家に住むこと自体が日常生活を送る上で無理である。また、自然を拒絶することで人間本位の人工的環境を造る流儀を今急にやめて、自然を受け入れる昔の流儀に戻るべきだとも、わたしは思わない。それに、今の人間が見ておおらかな空間に思えるあの家の中だからこそ、人間の血の残酷も残忍も悲劇もあった、くらいは想像できる。しかし、こういうことをすべて承認した上で、なおかつ、藁ぶきや茅ぶきの家、黒い柱に白い壁の家が美しく思える。殊に、藁ぶき、茅ぶき、板ぶきに荒壁のような家が美しく感じられる。それらが、民家園に復元されて展示されているのではなく、元の土地にあって、その中に人間が暮らしていたときは、更に美しいものであったに違いない。

外国で美しい家や家並みに感心したり、感動したことは何度もある。ところが、それらはその土地でのみ美しかったのは言うまでもない。日本の昔の、藁ぶきや、茅ぶきの家を美しいと思うのは、単にその土地の気候風土に合っているためばかりではない。家という文字が家畜の動物とともに暮らす所なのを表すように、人と動物が藁ぶきや、茅ぶきの屋根の下にいる気配が感じられるのである。生き物のねぐらのおいがそこにはする。それが美しく思える。

そしてまた、生き物のねぐらでありながら、そこに住む生き物の文化の高さを感じさせる。その高さがないと、茶室の美しさのようなものが出現するはずがない。

ところでわたしは工場の大量生産によって造られたプレハブ式の既製品住宅に住んでいる。今の時代は、なまじの美学やぜいたくで家を思想の表現とするのは難しい。家もレディー・メイドから何かが生

まれてくるかもしれないと、勝手に想像している。

精選『国語』Ⅱ（明治書院）より

● **新出語彙** ●

多摩丘陵 [たまきゅうりょう]	(名)	多摩丘陵
起伏 [きふく]	(名、自サ)	起伏
征服 [せいふく]	(名、他サ)	征服
びっしり	(副)	密密麻麻
モデル・ハウス	(名)	样板房
錯覚 [さっかく]	(名、自サ)	错觉
傾斜 [けいしゃ]	(名、自サ)	傾斜
美意識 [びいしき]	(名)	审美意识、审美观
丸出し [まるだし]	(名)	完全暴露、全部露出
民家園 [みんかえん]	(名)	民居园
町家 [ちょうか]	(名)	街上的房子、商家
合掌造り [がっしょうづくり]	(名)	人字型木屋顶建筑
樹木 [じゅもく]	(名)	树木
荒壁 [あらかべ]	(名)	粗抹过的墙壁
板ぶき [いたぶき]	(名)	木板屋顶
瓦ぶき [かわらぶき]	(名)	瓦房顶
茅ぶき [かやぶき]	(名)	茅草苫的房顶
おおらか	(形动)	落落大方
農耕型社会 [のうこうがたしゃかい]	(名)	农耕型社会
工業型社会 [こうぎょうがたしゃかい]	(名)	工业型社会
拒絶 [きょぜつ]	(名、他サ)	拒绝
流儀 [りゅうぎ]	(名)	流派、作派、做法

藁ぶき [わらぶき]	(名)	稻草苫的房頂
復元 [ふくげん]	(名、自他サ)	复原
家並み [いえなみ]	(名)	房屋的排列、家家户户
家畜 [かちく]	(名)	家畜
気配 [けはい]	(名)	情形、苗头
ねぐら	(名)	鸟窝、<俗>称自己的家
茶室 [ちゃしつ]	(名)	茶室
プレハブ	(名)	由预制件组装的简易房子
既製品 [きせいひん]	(名)	现成制品
なまじ	(副、形动)	勉强、轻率
美学 [びがく]	(名)	美学
レディー・メイド	(名)	现成服装

● 作者について ●

富岡多恵子 (とみおかたえこ)

一九三五年(昭和十)～。詩人・小説家。大阪府の生まれ。一九五八年、処女詩集『返礼』によってデビューし、ユーモアのある詩風で注目された。その後、詩のほかには小説や評論などを発表し多角的な活動をしている。詩集に『物語の明くる日』『女友達』などのほか、小説『植物祭』『壺中庵異聞』、評論集『ニホン・ニホン人』『回転木馬はとまらない』などがある。

● 言葉の解釈 ●

一、多摩丘陵

関東平野の南西部に広がる丘陵。東京都の八王子・日野・多摩・稲城の四市にまたがり、神奈川県北部に続く。

二、モデル・ハウス

商品の標準とされる住宅・建物。

三、工夫を凝らす

いろいろ思案して、よい方法を考えること。

四、日本民家園

日本各地の代表的な民家を集めた博物館。神奈川県川崎市にある。

五、合掌造り

木材を山形に組み合わせた屋根組みの家。

六、荒壁

荒塗りをしたままの壁。粗壁とも書く。

七、プレハブ

工場で生産された部材を現場で組み立てて家を造ること。また、その建物。

八、レディー・メイド

ready made (英) 既製の。ここでは既製品の意。

練習と思考

- 一、筆者の民家についての考えをまとめてみよう。
- 二、筆者のものの見方・感じ方の特色について、考えてみよう。
- 三、民家の美しさについての、筆者の表現方法を調べてみよう。